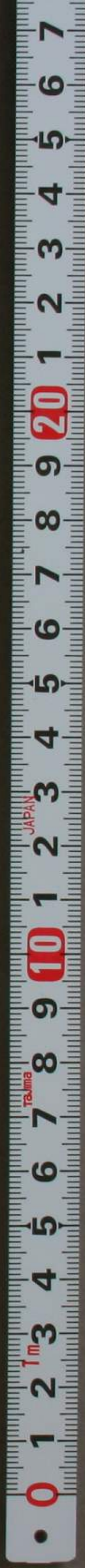


宇田川瀛譯述
地震預防說

完

中文圖書

洋学文庫
文庫8
C 90



文庫
C 90

臨谷

覆載萬理包
濟於人寸心

明治十三庚辰霜月
臨谷文藏

俊秀



此書ハ瀛 往年

味保氏曰瀛書

台命を奉りて千八百四十四年刻子一テ

ンツマカセイン書名譯曰和蘭寶函中より鈔譯セ

る者なり近時我邦諸州地震荐に發一山

川崩塞屋廬頽壞人畜の死傷勝て數ふ不

可らむ其慘實に極まり而して惑説恠

論次で行ハれ人皆驚駭度を失ひ惘然天

を仰き太息するの又曾て之を防き避

る術を知る者か一是を以瀛今辱稟准を

地震預防説

題言

一



得て此編を開雕するの舉何るに至るや
噫此瑣々多る小冊其説固確實なる者と
雖未完備の書と稱せしむ不足らば然れども
も之を以て古の蒙惑を解き且他の善法
を發明するの一端となるはと何は瀛
に於て殊に歡喜堪ざる所あり
安政三年丙辰四月 宇田川瀛識

地震預防説

宇田川瀛興齋譯

夫天地間も發も。景象の古昔に在て深く
人の稽考を凝せしむの多しと雖地震も於
るが如きは甚稀なり是も其諸變象の重切
ふして且おれも繼起する災害の忽にも
うささるる因くなり村邑都府より全州國
土に至るまで之を爲し震盪せしめて暫時

に變りて忽^チ慘毒哀むべき荒地となり最酷
しきハ或ハ其鳴動崩壁の勢數次休むとき
な多も曾て去きを避け減する術を知る去
となりりあり嗚呼此地震の懼るべき實
に其字面を見ても満身已に悚栗を生むる
ものや云ふ處一

地震の發するハ何等の理り由するもの系
るやと疑問あり人に切實よして誤なきを
う去きに答る去と甚難とまきやも前後名

賢の陸續として述る所の諸説を參考せば
亦頗^ル曉明する去とを得る前後の學者此
理小就て何事を説明せしや及ひ何様よ此
景象を辨解せんと欲せしやの諸件を記す
るや頗^ル無益小屬まきバあに之を畧す
唯其地震の發する基原を以て越^ニ列^レ幾^キ的^テ兒^ル
カよ歸せし説を擧るを以て足りしを抑
地震ハ地下に鬱伏せる雷氣より發するを
の小して夫の大氣の時令節を失ひ雷電雲

中より起ると一般の理あり今試に其雲霧ハ
輕虚散漫の水蒸氣より堅固凝聚の形
體なりと云ふ若し雷氣其中に起るバ
一搏撃ごせに全體便震盪を發する如と知
る也一是を以て推せば今我足底より發する
震盪ハ雲中より起る變象と同しく正に越列
幾的兒氣の地内より憤勃する寫照の外なき
さるの理自昭然たり此説の果して真理よ
本つけるハ日常實驗の得る所なるが故に

其甚重切の名説確論多々言ハ以て之知
る也なきなり古の名賢神智を以て能く越列
幾的兒氣の性情より精通し雷電を控制する
術を發明せしに又其同一道理より基きて地
震を預防する一箇の法術を發明せり
地震を越列幾的兒と相干係して説出せし
ハ「ドクトル官醫ストゥケレイ人名を嚆矢とす一
千七百四十九年英吉利國に發せし地震
震よりして諸窮理家皆此議より一同せり其

頃「ドクトル、ストゥケレイ」名人氏其考案を編述しておき、を王國の會社に頒配せり。爾後又「パルベッカリア」名人其議を主張し、且新に發明せる試験を添へて愈々其説を盛よせり。然るとも其疑團常に釋けず、其解をも所ハ唯、理上乃論考のとなむ。バ酷、真を得るよ似たりと云ふの外に言句を下を、「モントペルリイル」佛蘭西の都府の大學校の學士窮

理家「アブトベルトン」名人氏此景象を就て他の大著眼を起し、終身の力を竭して其理上の論を實事に驗し、從來此説に有つた能はざりし實力を添へて二十年已前「フランクリン」名人の制作せる避雷線を倣ひて地震を預防せる法術を創製を今爰に「ベルトン」氏が此を發明せし畧説を擧る。おと尤の如く、延衰甚巨大よ、且其延

き及ふおとの廣遠ふ〜萬國免る〜おと
能いさる變象を起す所以の原因ハ必至
大の威カ何る者ハ非れバおを發するに
足らざるべ〜從來諸家述る所の諸原因の
中唯越列幾的兒の〜能く其變動よりりて
遂に地震を伴へる大變災を續發するに足
る〜の〜あり或ハ一脈の大岳頭に無底の
地下に陥没〜或ハ不意に高山地中より湧
出〜或ハ無數の島嶼不測の海底に沈没〜

或ハ海中より現出〜或ハ彼に海を埋え或
ハ此に湖を生〜郷邑を滅〜州郡を覆〜
萬千の人命を瞬間に失ハ〜むるハ豈慘酷
痛哀の事なるや
斯く強暴なる原由より〜地震を發する
所以の理自明なり此地震に見る如き廣
大にして萬國免る〜所の怖る層々景象
ハ電光或ハ水カより發する〜非ぞ巨大な
る地底の塊片陥落する〜り發する〜非ぞ

硫黄、石脳油、類の激薄をより發せり。非
ぞ水蒸氣の張力或ハ水素瓦斯の爆炸或ハ
其他の物類の作用よりして發せり。非
をバ此諸件を以て決して全地球の震盪を
充分明曉せしむるが故にチベルス帝即
位の十四年某日の夜中に發し、亞細亞の
大都府十三處を翻覆し其廣袤大抵百里程
を徑り大地震を以て夫、地中の水蒸氣の
焚燒或ハ他物の爆炸より起原せり。是乃と

為せやまハトクトル、ストッケン氏の算に
隨ふに其廣袤_{里即百}の震盪を起す基原ハ地
中の深_十七十里の處ニ在り。之を以て推
せハ其爆炸の勢根脚の處小てハ五十里小
散布し、それより上に向て七十里の間次第
に圓錐狀小開き昇り遂に地面に至てハ直
徑百里の廣袤を震盪せり。此を以て觀
るハ「ストッケン」氏ハ筆せし如く創始て火
藥を製出せし昔時より今日に至るまでの料

材を一時に用ゐる爆炸も亦と何れも箇
様なる激動ハ起し得る亦と何れも箇
然るを況^キテケルキハ^リデル^{僧官}の^名アウグス
チヌス^名人の説に亞弗利加^名於て一瞬間に
百處の都府を傾覆せし地震の如き大變象
ハ亦甚麼^カ様に其理を考窮せしむべき也
但此怖るべき景象をバ一に越列幾的兒力
又係するものぞ看⁺做⁺をときハ其理自⁺明⁺晰
なるへし此説ハ從^ハバ地震ハ地底の雷電

小して唯大氣中の雷電よりハ越列幾的兒
の分量多く其力勢更に強きを異ありと
理學を以て亦と推に越列幾的兒^タハ容⁺易⁺
く巨大なる諸形體は通し且少くも其力を
失ふ亦とあしく著し之を遠きハ傳ふ
能し又其氣を傳る導線幾許の長⁺何れも同
瞬間に其末稍る感通し甚遠き地ハ傳るも
曾て其力を減する亦とハ佛蘭西の學士
デ、ル^ク名^人氏銅鐵の線條を^口子^子河の水底

又、まゝ越列幾的兒氣を「地志を」
赫爾勿、亞の佛蘭西、界せる地、在る湖
水の名、此湖水より、ロ、子、河起りて、地中海
小ハの湖中より海に引導せしむるを考
 定を、系、統、あり、遠く引導せしむる、試験も多
 かりければ、亦遂に其力の耗失せしむるを見
 る事なり、此故に越列幾的兒氣地内小於て
 此處より彼處に激發せしむる、總て其氣の通
 及せしむる、全地ハ必も一同瞬間に感激し、而
 して其各處に震激せしむる、勢ハ其別あり、越列

幾的兒氣ありと論議せしむる、事を、須、ひ、せしむる、な
 り、越列幾的兒氣の迅速なる、勢ハ大抵一秒秒
 時毎に五里若くハ其餘も、達せしむる、此故
 に譬へハ、歐邏巴全洲を一震せしむる、勢ハ就て
 云ハ、本大洲の中央より發せしむる、地震ハ此
 洲の廣袤を、竟るに必も四面五百里、小激射
 せしむる、是を以て歐邏巴全洲の人、一震激を
 覺るハ、百秒時を、須、へ、き、なり、故に此震盪ハ
 本來此より彼に進行せしむる、者なきとも、其勢

極欠て迅速あるを以て畢竟其を認て一
 同瞬間に震激する者と為せるなり但し他
 の説を以て之を推鑿せし究竟允當ありと
 する理何れとも此に述る越列幾的兒氣と言
 へば遠く相距たる地も能く同瞬間に震盪
 する景象を領會して疑ふ所なきなり
 地震ハ原来越列幾的兒氣の鬱蓄せり由
 なるその形るときハ其迸裂せる景象を夫

の雲霧中に觀る所の雷電乃景象と全く差
 異なるる也一而して其兩象實に相並ん
 發も地震の將に發せんときハ已前より必
 ち先づ空氣中の越列幾的兒氣に一箇の障
 逆を起すを觀る即異常の暴風雨劇しき雨
 電及び其他諸の變象等なり八百二十二年
 に歐邏巴を翻覆せし地震ハ猛しき暴風雨
 と併せし發したり九百六十八年羅馬の東
 京よりありし地震ハ劇しき暴風と薰發し

一切の植物を打潰し闔國大饑饉となりたり千五百三十三年赫爾勿萎亞國より大颶暴風有りて同年數地震を發せり千四百五十年意太里亞の南部を翻覆せし地震ハ其前二箇月の間毫も風ありて淋雨日打續けり又千五百四十三年意太里亞に發せし地震ハそれより先つゝ猛しき迅颶有り當時の震盪劇しく納波里ナガリアに響けりと登時トキ躬親其景況を目撃せるペトラルカペトラルカの筆

記に此夜の凄まじき状景實に天地萬物一時に消滅して其元行り還るると疑ハ其慘毒放る紙筆に盡せり唯雷電暴雨海嘯の鳴動地下の震盪を薫たる怖るべき颶風の吼咆を聞くのと云へり又地震の間火炎を發せしと屢あり大に地下の電光雷撃乃地上に遂出せりなりカリスカリステテ子子スス石石人人曰昔時の都會へりセ及及ひひリスリス又又ババララの地陥没せり已前に顯ハ

前表二個あり皆人の意を留むべき所なり
 即^チゴロス^地名小叢せ地震及び大なる火柱
 の立し是なりフリニス^人名曰意太里亞の夕
 ラシノニス湖を激動せ地震あり一時其
 湖の水面徧く火炎布き蔽へりと云へり千
 七百二十六年パレルモ^地名よ於て數百人性
 命を失ひ多る地震の時其四分年の間地下
 に尤怖る強き鳴動を聞たり一其間絶え
 少し暴風猛雨の蹤跡なく其後數條の火

柱地下より立昇り海に列りて去り遂に消
 散せりと云千六百八十二年^レモン^ト
^地名小叢せ地震ハ巨大なる火炎地下よ
 り立昇りたり是を考証せしに其火炎ハ絶
 て他物を焼く性なりと^モ是を越列樂的兒
 の火炎乃本性なるハ人の明知する所なり
 又地下より叢き鳴動ハ地震の一徴象と
 大學士^レベルト^ン^人名の説に此鳴動を強く
 越列樂的兒氣を受ふる導線より閃叢き

越列幾火の鳴動と毫も異ならずと云へり
此外又屢他の鳴動を聞く亦を實驗せし
人の皆同一く其響動ハ雲中より發する雷
鳴と全く異ならずと語り是を實に地震
と天雷と頗相同しと徴し此諸景象ハ越
列幾的兒を主とし發する實に疑を容さ
るときハ地震も越列幾的兒氣の景象より
發現するものなり亦甚明なり
又一室の内より地震の見象と等しと越列

幾的兒の現象を容易に生ぜしめて亦幾
試驗を爲し得る爰に越列幾的兒を施せ
る方隅の物一箇を置假に亦を大地平面
の一部と定め其上に紙より摸造したる五
に離れ立てる小家屋幾箇を配置し假に六
を一箇の街衢と定む又亦より越列幾
的兒氣を通せれば即時に閃光爆鳴一方隅
の物震盪し紙造の小家剝しと激動しと顛
倒し登時差高處に設けたり越列幾的兒驗

儀ハ自ラ揺動一馬空中の越列幾的兒の比例
 大なり為に障碍を生ぜ。證徴を現もな
 り其障碍強盛なれば颶風暴雨等を起るに
 至る也一此切要なる試験ハ蓋一アブトベ
 ルトロン人名の著意に係りりと云へり此法
 小由をハ常に地震の見象乃性質及び原由
 を曉明するの事なれども又少く地震を預
 防も術を試験一得る一
 ホンテ子ル人名が著せる「ヒストイロ、デア

カデミ人名に曰凡造化の理を發悟する良
 術ハ先つ其理を領會一而して其事を成就
 一得べき原因に由り天造の者と同様なる
 見象を人為におく發一得るものと何るときハ
 先つ其事物を擬造して其本説を定むるも
 何となり是に於て復他人と商議せし隻眼
 を開ひて熱觀するときは今製する物の見
 象ハ天造物の見象と同一原因より成り若く
 ハ大なりと甚相似たる原因より成立するを確

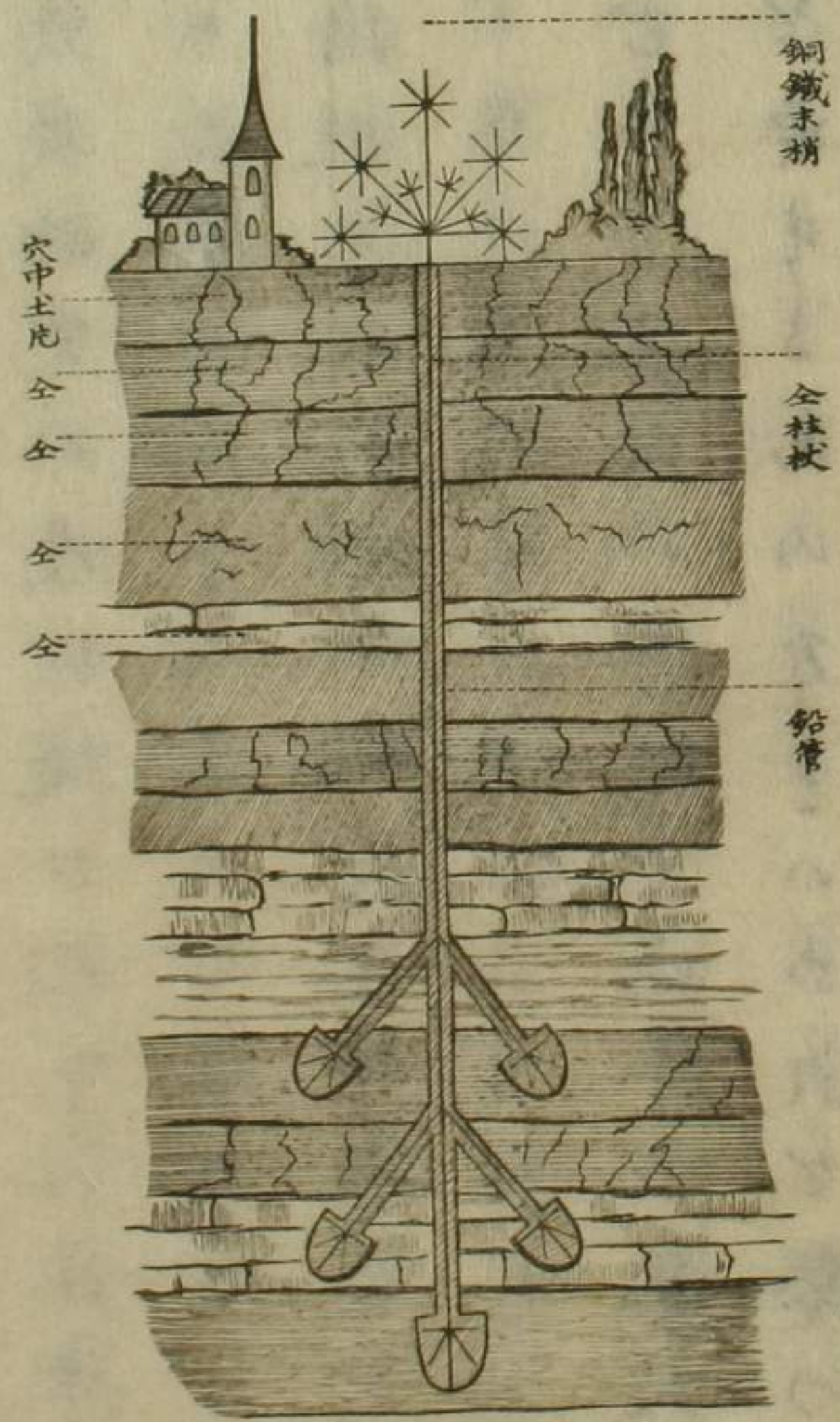
証するに至る後一學者篤く辛勤して地震の原理を索知せし後又其怖るべき變象を預防する術を發明せんと心神を凝せし固より其事態の然るべき所なり凡そ知らざる所を知り未だ明にせざる所を明にして其學問を究め盡せしときハ大なる用を發して其効を世に施さん大なる務りハ當然の理なり其本義鬱塞して明らざるに方てハ大なる看破する大と甚為難き事

業なきとも既に大なる發明せる上ハ容易に其理を他物に擴充するを得るべきなり今夫の氣中の越列幾的兒小由る雷電を興む可如く正しく地内ニ鬱蓄する越列幾的兒氣は由て地震を發する者なるを知らば乃世間に通知せる避雷線と一様なる器機を設けて地震を避んとす意匠を容易に起すべきなり「アプト、ベルトン」名曰千七百五十二年以前學術未だ大に開けざるの

頃に在て若し窮理學家卒に我雷を驅使し
自由に導きて其欲する所の地を降らし
及ひ能く其道路を教へ彼を制して必を指
示し多る方向に隨ハしむと云ふて其
説を主張せば當世の人皆舉て大に此議を
非駁するなるを以て然るに其後遂に其説の
果して正説たるかと昭然白日の如くなる
を知り官俗共に概して皆避雷線の至當の
理に信服し竟に其法を据る其器を製し設

るに至るりと云へりあるを以て推せば此
の如き地震を豫防する法術も亦發明する
きふありしや抑雷の越列樂的兒氣に係る
大とい銅鐵を以て引導すべきを其証とせ
蓋し其引導線ハ凡其意の欲する所に隨て
雷を地球及び空中に引致さるべし今地震の
發するも固より是と同一なる越列樂的兒
氣に係るものなれば其怖るるを見象を
防く同一なる器機案云に銅を用る

りて他の理あらんや是を以て大學師べ
 ルトロン氏ハ實に初て其設施を此目的
 に達せんと思を凝せりべルトロン氏夫の
 地下に重積鬱伏して地氣と大氣の以準を
 缺ける越列幾的兒氣をして漏去る一人
 が爲に銅鐵の柱杖を務て深く地中より刺入
 ろとを定む其柱杖の兩端一ハ地中に入一
 ハ地表に出ハ種々の末梢小分を其每梢
 悉く尖つて甚銳利なるんおとを欲を其地



下の每梢より地内の越列幾的兒を引き導
 き引導柱り傳へく地上の濛氣中へ送り遂
 にホをを每梢の尖端より漏謝せしめて此

運動をして少しも間断なく常に流行せし
 べ以て一の障礙又震盪を起さざらざる
 べし尤も引導柱杖の多少ハ各地平常何處所
 の越列幾的兒の度に隨ひおきに以準して
 是れが差異を爲さへきおと亦自明なり又
 手其諸般の酸化即案備に〔酸素の結合〕を豫免
 防んが爲に其引導柱を鉛鉛にて造るる管中
 へ納むべし其穴ハ甚深く地中へ鑿入する
 べしを要するものなりハおれを鑿つての費

金幾何なるを精く算定し得るべし其故ハ其
 深淺の多少ハ其地内に在る越列幾的兒ハ
 關する者なきハあり學士「ベルトロン」曰此
 越列幾的兒の定情を領得せば諸窮理家皆
 此地震を豫防する新法ハ同意をばし此器
 ハ元ト避雷線と太太相類似し其方法究竟同様
 の理を基けるも乃よして且其主能亦全く
 趣を同じく故に此器ハ於て實に其安全必
 用の功を致すものなりハ彼器ハ於ても其

功用益一亦差ハド又銅鐵の効力小由て雷
電を避べき大とを確徴セバ地震を豫防も
る法に於ても同様の効力を呈する大と亦
疑ふ所可く今又再ハ上説を反覆一述ん
に夫の地震ハ越列幾的兒より叢する見象
小一て其現象ハ越列幾的兒の平均を障礙
するより一て著しく叢するものなり正一
く地中小在る銅鐵の末梢より越列幾的兒
氣を吸入せられバ引導柱より大を傳送致

るを以て其平均再ハ故に復一聊障礙を生
ずる大となると云へり
此法術ハ未だ大に古小行ハるを國君大
家皆此鴻大なる一舉を試験する大とを果
さバ其故ハ其説に従へバ真に其成功を得
る大と疑なきが如くと雖大きを設施する
に及んて實に必其効何りて萬に一も失せ
ざるものと豫定決を可らせられバなり然も
とも既に前章に説明せる試験方隅の物を

設る越列獎的兒力ふて地震の景象を觀る
 法方カふて夫至小の處に於て著しく其怖る
 べき現象を發せしむる處とを決せバベル
 トロン新發明の功用も試験に由て其証を
 得へき處と亦必しも抹殺ウチケスすべき非を此
 地震を擬造する人爲の裝置に準して處に
 べルトロンの豫防法を併せ設くるとき
 ハ越列獎的兒の漏出する勢小由て嚮ナにハ
 一齊に顛倒せし紙造家屋今ハ毫も揺動を

らふとなく且一の震盪をも起さざりて越
 列獎的兒氣暗に其銅鐵の末梢より漏出
 更に其見象を露さるなり往昔地震小就
 て大に工夫を凝せし人何り其發明する所
 亦稍ヤべルトロンの發明と相符合するを
 何り其説に曰深き坑穴ハ地震の劇勢を避
 る安全の處なりと云へり此を坑穴ハ地内
 と濛氣の際を聯絡せし易きハなりプ
 リニユス名此説を信し地震は由て數劇しく

荒さき一幾多の都府を命じて深井坑穴を
 其周圍を穿ぬむべしと決せし由を記せ
 り是より已來頗其災害の懼を減せりと云
 遷瑪入嘗てカヒトール遷瑪の城を築きし
 時此豫備法を用ひしに其一部のみ常は
 殆地震の激盪を受ざる故に此豫防法爾來
 次第に其國中を行はせたり一千七百年代
 の初に發せし劇しき地震の頃タウリス
西の伯爾西亞人其都府伯

の周圍小多く深坑大穴を穿たし其
 舉果して驗有りしや又ハ他の事故より由
 る大なるやハ知る能はざれともそれ
 よりして地下の振盪漸々に鎮まると云
 獨此深き坑穴のよみて猶既に斯く洪福を
 得るものなりバ其數多の坑穴小夫越列幾
 的兒を地上より漏出せしむる銅鐵の引導器
 を具へバ其大裨益ありと果して如何ぞ
 や抑此正直なる深き坑穴小一箇の引導器

を安置せば恐くハ全國中おまが爲に經久
の安全を保有し得へきなり
「ベルトロ」氏其發明を告小顯ハせしに當
時の知識家此議ヲ尤祖する者少ありを就
中意太里亞の窮理家ハ其本國多く地震の
難何るを以て直に此説ハ同意し試験を以
て必も其實を得べきおとを証せり選瑪の
有名なる窮理大學師「アブトカハル」氏ハ
「ベルトロ」氏が發明の殊益何るおと及ひ

施設を極きおとを告小公布し「リッタル」
目のヒセンシラ人氏ハ千七百八十八年カ
ラ「ブリ」納波の部里小發せし大地震の頃地震
の總説を著し其篇中佛蘭西大學師「ルベ」
指しその説を深く信奉せり又有名の大學
師「サル」人ハ「ヒサ」意太里亞の一都會に於
て一書を著し地震を論じて「ベルトロ」
の説に尤祖せり以西把尼亞の王ハ其本國
及ひ殊に米利幹所領小於て此怖るへき難

を蒙り出と常に酷しきを以て此地地震豫防
 法を發明せる人^{即ベルトロ}り甚恭謙なる
 書を贈り大に此法の試験を爲さへしと然
 せとも全く其言辭のよみて其事ハ遂に舉
 行ふに及ばしり一千七百八十一年大家^フ
 フホ^名書^人を^{ベル}トル^トロン^ンに贈て曰吾子が
 所謂地震ハ毎^ツ日に目に視るに足るべき火氣
 を含有せざる越列幾的兒^キキ原^キを^ルの説
 全く予意小合^テへり予以為^ラく大凡大地の震

盪ハ意太里亚等諸地ニ發せし如く其劇度
 ハ能く其全地を荒れお至るや^トと雖其越
 列幾的兒氣ハ一も物を焚燒する勢なく又
 一も火焰を發するを見るおとなし若夫地
 下の猛風暴飈其勢極兇て劇烈なるも越列
 幾的兒おきを助るに何れ^ハ地震の如
 き猛列なる景象を發するに至るや^ト抑^セ
 ナ^ナ波^リ里^アカタ^ニア^アの^西一^府里^亞リ^リボ^ウル^子西^佛蘭^の
 一府^の己^上皆^等の諸地に於て其最要なる
 地震多き地

地震頁方免

事体を領會するに至るば則ち吾子が發明
 せる地震豫防の法を造建するおと必せり
 然るとも吾の學者其深智を以て古來の迷
 惑を閑導せんおと何の時小何の也と
 地震の危難を避んが爲に出の豫防法を建
 制するに當てハ實に幾鉅萬の金を費さべ
 き故を以て以て是を行ひし地あるを見
 然るにあに一言をいさか^フランキリ
 人^名が初て唱出して當時亦十分完成せざ

以發明の器〔即避雷線の發明〕を建制する
 爲に若し亦幾百萬の金貨を要するおとな
 るに今に至て唯巧に其理を説のこして鴻
 益何の豫防法を現に施用する地何のなる
 べし
 地震豫防器の効力を強くしめんハ此器
 を其の距離を以て數箇處に施しおとを
 と互に聯絡感通せしむべし^トロソ^氏
 恰好此制を領會して凡都府の四面及び領

界の内又ハ火焰山の側及ハ谷間平野等に
此巨大装置を施スルことを欲スルベシト
ロン氏其每地の怖ろしき災害を發スル猛
カヲ以テ例シテ其法を施スルガ爲ナリ夫高
波猛浪の奔勢甚脆弱ナル堰堤を衝クバ其
力能波浪の怒激ヲ堪ルことを得ズ怒潰決
シテ多少其造築ヲ費ヤセシ人力金貨も徒
ニ亡失モシ然ルに其奔流を數處に分岐
セシメバ其狂暴なる勢を奪ハレ堰堤能其

力ヲ當ルことを得テ波浪も亦能ク其力を
傷害スルことを得ルハ是れ正しく其
分岐ヲ由テ水勢を殺シバなり此譬喩の如
く先ツ越列幾的兒氣を地下小テ吸収シ
其を地表ヨリ引導シテ數處ヨリ分岐セシ
道理を以テ較スルハ但鬱伏重積シテ極大
劇シキ爆裂を起スル越列幾的兒也彼の
數道の小流ヨリ分導スルに奔水の如くな
る也今其越列幾的兒ハ其初ハ甚暴劇ナル

る勢何をも終に數道に分注せし末梢に至
るに及んでハ其勢甚緩漫して遂に毫も奔
激の勢を見ざるに至る
但地震を豫防する器ハ數多を装置するを
要するが故におきか爲に必しも幾百萬の金
貨を費すといふ言ハ誤して知るべし其故ハ
當り此器を斯の如く多く装施するは
のなきを極えて深き坑穴を鑿る費金算
まへるをも且人出を造成するハ必しも

爲に幾百萬の金貨を要するを切實に
算定して其必然を證するときはハ其費を所
果して過多に失するの誤認あるべし
るべし然れども斯く大切要にして過る
る用何の大設施を企て爲すか當て縦令幾
百萬の金を費すも聊支障何のなき道理な
く且一か所を設け爲すに及てハ其鴻績疑
何も出たなりや云ふとも出を非駁する
も乃果して幾人あるやヘルトロン曰又或

ハ余が此装置ハ夥多の費金を要するものと
 難ざる者なりん此固より爾り然きとも
 余將他の一端を擧て之を論せん地震よ由
 て暴ききたる景象ハ極て慘酷なる禍災
 を遺し且其受る所の害殆常に算まべし
 さるふ至る人豈おと如何可争んや全國
 之が爲に暴掠せしれ郷邑都府も覆亡して
 古き敗瓦類垣堆積して丘の如く萬千の人
 民ハ地中よ吞まじ或ハ殘傷を被りて死亡

を等是皆怖るべき災厄の極と云ふも
 今豫防法よ由て累萬の金よりも至大なる
 害を防き得ば之を造るに豈費の大なるを
 論まべけんや但此大金を出し募る應きハ
 抑王侯大家の本務あり此他系統緊要なる
 費金の記載數多と雖亦に之を記すを須
 ひぞ其故ハ此一法を設施するハ萬千の人
 生を保全する法術に關するおとなれハ更
 に口吻を費すおとを須ひざるハなり費金

ハ軍事の費金と以較し得べきも何れも況
 軍陣ハ間不義不正なる舉あり又壯麗なる
 宮殿を建築する費金と以較し得べきも何
 ろも此預防法ハ納波里王ナポリに在てハ必そ
 事を建制せんことを欲せ是を其プリエス
 王のの時發せし殘暴なる禍災の事を回思
 して其秀麗なるホルチーナポリの一府より急遽
 に逃避せしむると既に二十四の上に出るハ
 なり葡萄茅王ポルトガルも亦此例に従ハ人々を欲

是是廿二十五年劇し大地震ありて此
 國乃首區全く其殘暴を蒙り多時乃數互
 碎礫今なほ其地ニ散在せるを以てなり以
 西把尾亞王も亦其所領の兩地按此處に本
 幹の雨共し地震の難を蒙るべし數回あり
 地を云共し地震の難を蒙るべし數回あり
 若夫全大地上一民も恐くハ地震の爲
 毀損し又ハ之を爲に殆死に至るべき底
 備を蒙らざる者ある處に故を以て此
 數の諸王公侯互に相約し現に我曹地

地震預防説

住する不幸なる地球上に蜂起するものと云
一撥賊徒の如き夥しき残暴なる地震を
驅逐せおし去ると余が希望する所あり
ベルトリロニ此説及共述べた所の緊要なる事
實ハホモるを誤解する事とある處から但
し同氏出たてで徒らよ多か説話と其意せ
しことも其卓出なる發明ハなれど其意を施し
行ハせざして有志者の希望する所となら
るもの其擧用せざして實功を為さざると果

實ハ跡
ナルヤ判然
せず

して速なる歟或ハ漸を以ておきり歸まら
歟ハ豫知得べき小何とぞれとも此事の去
は擧用せらるる人おとハ我曹の固赤心企望
もる所なり然もとも嚮に「ブフホン」の贈
言に去の學者智見を明瞭にして古來の謬
悞を指し諭さんおと何の時も在る處きや
の一句お就て當に善く慮をあらに致さべ

地震預防説終

夫ト世運ノ愛遷スルヤ實ニ著シキ者
ニシテ彼ノ進退本没車輪ノ大路ヲ轉蹻
スルガ如ク其ノ隱顯愛幻潮舞又猶
秋天ノ曇晴定ノ難キ似タリ然レテ我
國文明ノ進^輪退ハ實ニ始末有年其基トス
回觀ノ其基スル所
年數恰ニ將 十四日星霜ヲ経過セシメ

此微積ノ歳數ニ以テ斯リ文明之域ニ
 進歩セシメ、實ニ各國ノ歴史上ニ未ダ視聽
 セザル所ナリ、然リ而シテ物理ノ學亦モ之ニ隨テ
 進歩スルニ由リ、之ニ應ジテ今日忽チ眞理ヲ
 推究シ掃然然疑團ヲ抱カサルガ如キ則チ之レ進歩
 一歩シテ窺フニ足ラズ、此書ノ如キ則チ其進歩ヲ助クルニ要
 ス、ト云ヒ未ダ人々ノ以テ觀ミズ、依テ余拾収シ冊子ト爲シ、
 明治十三年
 藤村秀俊

北越長岡町

蒸谷木乃俊

